

六ノ六 笠置上人般若理趣分奥日記

出典 弥勒如来感応抄第二（東大寺蔵）

解説 貞慶は養和二年十一月に大般若經六百卷の書写を始めて、これを建久三年十一月に完了した。笠置入山の思いはこの写経の間に徐々に固まっていたようで、写経の完了する前の建久三年二月には藤原兼実が貞慶を自宅に招き、笠置入山の真意を問いただしている（玉葉、建久三年二月八日の条）。

貞慶は笠置入山後、この写経を納めるために六角堂を造り、更に精舎、僧坊を加えてここを笠置寺における活動の基地とした。

原文

笠置寺上人般若理趣分奥日記云建久六年<sup>乙卯</sup>秋七月二十四五  
兩日之間於笠置寺奉書写訖去三年<sup>壬子</sup>八月之此於当山弥勒  
石像前書写此経異念相交聊有遺恨仍重雖繕写凡心如旧可  
悲可恨凡自去養和二年十一月二十七日<sup>至</sup>建久三年十一月  
二十七日首尾十一箇年之間發深重大願奉書写此経一部六  
百卷偏為上生内院見仏聞法令法久住報恩利生也世途忿忙  
不得休閑詵他筆終大功今染拙筆纔写一軸志擬全部自書之  
儀造黒漆六角経台一基安置此経未及永代住持之儀然間去  
去年秋移住当山以為終焉之地仍卜一閑地建立六角三間高  
台一字縹素善友助成愚願二年之内土木漸欲成盖是宿生願  
力之所致歟粗有無想告等以為奇矣所生功德廻向旁多然而  
所歸者只此経留住至于釈迦如来遺法滅盡之期其間利益無  
量有情仏子及同侶臨終必預諸仏賢聖來迎上生兜卒内院慈  
尊宝前見仏聞法開悟般若引接無量衆生令發菩提心矣種々  
願等如別記之

法相宗沙門貞慶

読み下し文

笠置寺上人般若理趣分奥日記に云く。

建久六年（一一九五年）乙卯秋七月二十四五日兩日の間、笠置寺に於いて書写し奉り訖んぬ。去三年壬子八月之此、当山弥勒石像前に於いて此経を書写す。異念相い交りて、聊か遺恨有り。仍って重ねて繕写すると雖も、凡そ心は旧の如し。悲しむべし、恨むべし。

凡そ去る養和二年（一一八二年）十一月二十七日より建久三年（一一九三年）十一月二十七日に至る首尾（前後）十一箇年間、深重（深く大きい）の大願を發し、此の経一部六百卷を書

写し奉る。偏に内院に上生、見仏聞法し、法を久住（久しく留まること）せしめ、報恩利生せしめんが為也。

世途（世の中）忿忙にして休閒を得ず。他筆（他人が書く事）を誂え、大功（大般若経六百卷の書写のこと）を終う。今、拙筆を染めて纔に一軸（巻物）を写し、志全部に擬して自ら之を書するの儀とす。

黒漆六角経台一基を造り此の経を安置するも、未だ永代に住持するの儀に及ばず。然る間、去去年（建久四年）の秋当山に移住し、以て終焉の地と為す。仍つて一閑地をトび、六角三間の高台一字を建つ。

緇素（僧侶と俗人）善友、愚願を助成し、二年の内に土木漸く成らんと欲す。盖し是れ宿生（前世）の願力の致す所か。粗し無想の告げ（笠置寺縁起に、般若台上棟の前日、伊勢大神宮内宮において神の姿を感得したとあり）有る等、以て奇と為す。

所生（父母）の功德、廻向旁多し。然うして帰する所は、只此の経のみ。留まり住いして、釈迦如来の遺法滅盡の期（末法思想）に至るも、其の間の利益無量にして、有情の仏子同侶に及び、臨終において必ず諸仏賢聖の来迎に預かり、兜卒の内院に上生、慈尊の宝前に見仏聞法し、般若（最高の真理を認識する智慧）を開悟（真理を悟ること）し、無量の衆生を引接して菩提心を発せしむ。種々の願等別記の如し（笠置寺般若台供養願文のこと）。

法相宗沙門貞慶